

試論森鷗外之《青年》： 小泉純一「夢」中的女性

廖育卿

淡江大學助理教授

森鷗外自小倉時期回歸後的代表性長篇小說《青年》，自發表以來便飽受失敗的「模倣作」之負評。本論文探討在《青年》作品中，於小泉純一的「夢」裡出現之三位女性的「表情」，經由她們帶給小泉五感上的刺激，釐清在其「夢」中出現的女性定位。

首先，透過與小泉純一初次見面的分析，勾勒出小雪(お雪さん)、坂井夫人及阿茶(おちやら)的「表情」輪廓，再以三位女性所表現出的五感誘惑為媒介，確認小泉純一對女性的渴望來源。例如，小泉純一並非受到坂井夫人直接的誘惑，而是先從視覺上的刺激，進而被她漸漸傳達來的聽覺、觸覺、嗅覺以及味覺所魅惑，最後才有了肉體關係。

接著援用笛卡兒的『情念論』，探討主角純一內心的情慾世界。在「精神的被動性」與「精神的主動性」(知覺與意志)的相互作用之下，梳理出他對於坂井夫人的複雜情感的脈絡。最後，套用佛洛伊德及榮格的「夢境分析」理論，從小泉純一的夢中所出現的女性順序，檢視純一對這三位女性真正的喜惡，亦再次確認他心靈深處理想的女性形象。

關鍵字：森鷗外、夢、五感、理想的女性形象、視線

Mori Ogai's *Seinen* :
The Women in Junichi Koizumi's "Dream"

LIAO, Yu-Ching

Assistant Professor of Tamkang University

Abstract

Seinen, published after Mori Ogai's return to Tokyo from Kokura, is one of his famous novels but always criticized as a poor mimic. Focusing on the three heroines' "facial expressions" appearing in Junichi Koizumi's dream, this study explores the significance of the sensual stimulation of five senses that Oyuki, Lady Sakai and Ochara brought to him.

First, the outlines of Oyuki, Lady Sakai and Ochara are sketched out through the analyses of their "facial expressions" at their first meetings with Junichi Koizumi. It is clear that Junichi Koizumi was fascinated by the expressions of the three women's senses. Not directly seduced at the beginning, for example, Junichi Koizumi was gradually fascinated by Lady Sakai's visual stimulation, followed by those of hearing, touching, smelling, and tasting, until he finally had a sexual relationship with her.

Then the study employs Descartes' concept of "Les passions de l'ame" to explore Junichi Koizumi's inner world of desire. Junichi Koizumi's complex for Lady Sakai is clearly revealed under the interaction of "the spirit of passivity" and "the spirit of the initiative" (the consciousness and the will). Finally, based on the dream interpretations of Carl Gustav Jung (1875-1961) and Sigmund Freud (1856-1939), the order of the three women appearing in Junichi Koizumi's dream reveals the degree of his like/dislike of them and further verifies the ideal female image in his mind.

Key words : Mori Ogai, dream, five senses, ideal woman, eyes

森鷗外『青年』試論 —小泉純一の「夢」に現れた女性達を中心に—

廖育卿

淡江大学助理教授

森鷗外の小倉時代から復帰後の代表作の一つとも言える長編小説『青年』は、発表されて以来、失敗した「模倣作」という不評を受けている。本稿では、『青年』における小泉純一の「夢」に現れた女性達の〈顔〉を検討しながら、三人の女性達が小泉にもたらした五感の刺激によって、「夢」に現れた女性達の位置づけを明らかにした。

まず、小泉純一との初対面の分析を通して、お雪さん、坂井夫人とおぢらの〈顔〉の輪郭を描き出し、そして三人の女性に現れた五感を媒介として純一の女性への欲望を見出すことが確認できた。例えば、小泉純一は坂井夫人から直接的に誘惑されるのではなく、最初に彼女の「謎の目」である視覚の刺激から、次第に彼女から伝わってきた聴覚、触覚、嗅覚、と味覚に魅了され、最後に肉体関係を持つようになったのである。

さらに、デカルトの『情念論』を援用し、主人公純一の情欲の内面を探究してみた。「精神の受動性」と「精神の能動性」（知覚と意志）の相互作用によって、坂井夫人への複雑な感情の脈絡が明らかになった。最後に、フロイトとユングの「夢分析」理論に基づいて、純一の「夢」に現れた三人の女性登場人物の順番から、純一の心の深層にあるこの三人の女性に対する本当の好み、若しくは理想的な女性像を改めて確認することができた。

キーワード：森鷗外、夢、五感、理想的な女性像、視線

森鷗外『青年』試論 —小泉純一の「夢」に現れた女性達を中心に—

廖育卿

淡江大学助理教授

1.はじめに

「ドイツ三部作」¹をはじめ、森鷗外は長い間短編小説、翻訳、評論などの文学活動をしてきているが、『青年』²は鷗外の現代物の中で、珍しいとも言える長編小説である。この『青年』は、彼の最初の長編小説で、小倉時代³から復帰後の代表作の一つとも言える。

しかし、鷗外文学では重要な位置を占めているこの『青年』を「失敗作」と評価する声が少ないようである。それは同時代に発表された夏目漱石の『三四郎』との関わりを言及しなければならない。主人公の名前（『青年』では小泉純一、『三四郎』では三四郎）をはじめ、時代背景と人物設定（田舎から上京する明治期の青年学生）、作品テーマ（新時代の変化や恋愛・女性との付き合いによって新たな人生の方向・目標を獲得すること）などまでよく対照して論じられており、失敗した「模倣作」と不評される⁴。

¹ 『舞姫』、『うたかたの記』と『文使ひ』を指す。

² 『青年』は明治43年7月から明治44年8月まで、『スバル』に連載された森鷗外の最初の長編小説である。主人公小泉純一は作家という文学志望を持って上京すると、同郷の先輩作家大石路花のもとを訪ね、親しくなった医学生大村を知って啓発されたりしていた。平田拊石のイブセン論聴講、イブセンの「ポルクマン」観劇で未亡人である坂井夫人を知り、そのなぞの目に誘われて交渉を重ねた。恋愛感情のない性慾をふり切った「寂しさの中から」、〈現社会〉を描くことに志した小泉純一は、〈伝説〉を書く企てに目を向けていく。

³ 1899年6月8日に森鷗外は軍医監に進んだが、第十二師団軍医部長に任命され、小倉に赴任することを余儀なくされた。1902年3月14日に、東京の第一師団軍医部長に任命され、上京した。

⁴ 石川淳（1941、『森鷗外』「現代叢書」第十七編、三笠書房）は「『青年』を一読して、どうもこなれが悪い（中略）まづいと云ふに近い」と述べ、高橋義孝（1946、『森鷗外—文芸学試論』雄山閣）は「『青年』は、寓意性、内的構造の破綻、粗笨無意味な描写などにおいて、（中略）畸形性を紛れもなく示している」という。また、唐木順三（1949、『森鷗外』世界評論社）は「不完全な、隙のある、まづい

『青年』の作品内容は主に、思想（「個人主義」、「利他主義・利己主義」との関与など）、芸術家（イプセン戯曲）とセクシュアリティー（女性登場人物との交際を通して得たもの）との三つに絞られることができる⁵。つまり、主人公の小泉純一が上京した生活体験、性的体験と情欲体験をめぐって、純一が「立身出世」できるかどうかを論じるものである。そのため、主人公の小泉と言葉を交した8人⁶もの女性登場人物から探究したものは比較的少ない。この三つのテーマのいずれから切り離して読むのは難しいが、これまでの先行研究の重点である男性から女性に置き換え、『青年』を再検討することを試みたい。

前述した『青年』に登場した8人の女性に出会ったことは、それまで女性遍歴のない主人公である小泉純一の女性への認識を深める役割を果たしたが、その中で特に、純一の心を引く女性が三人いる。それは、純一の夢のなかで入れ替り立ち替り現れてくる、銀行頭取の娘で清純な「お雪さん」と、男狂いの芸者「栄屋おちゃら」と、謎の目を持つ「坂井夫人」である。むろん、この三人の女性の中でも、肉体関係を結んだ坂井夫人が特別な地位を占めているのはいうまでもない。それに対し、芸者のおちゃらとお雪については、言及したり、比較したりする内容が書かれている、そうした内容を入れている作者の意図は興味深い。そして、『青年』に「夢」というモチーフを取り入れるのも興味深い。しかし、従来主人公である小泉純一を中心にされてきた研究現状から言うと、それぞれ重要な役割

作品」とも述べ、中野重治（1952、『鷗外 その側面』筑摩書房）は「純一を使って時代の悩みから、自身をむき玉子をみたように防衛しようとした鷗外のはからの失敗」ときめつけてもいる。

⁵ 小林幸夫（2007.1）「森鷗外『青年』論一反〈立身出世〉小説」（『上智大学国文学科紀要』第24号）P.75

⁶ 主人公小泉純一と言葉を交した8名の女性登場人物は、お雪さん、お安、植木屋のお婆さん、坂井れい子、しづえ、栄屋のおちゃら、名の知らぬ女とお絹さんである。（【付録】を参照）

を担う女性登場人物、または女性像の比較について、これまで十分な考察がなされてきたとは言いがたい。

また、「夢」というモチーフは他の文学作品においてしばしば取り上げられるが、鷗外の作品ではあまり見られない。そこで、本稿では小泉純一の夢に現れるお雪さん、栄屋おちゃらと坂井夫人の造形に重点を置いて検討し、主人公小泉を批判する視点から多くの批判を受けてきた『青年』を再検討することを目的とする。考察手順としては、まず、三人の女性に関する描写を詳細に分析し、小泉とやり取りした場面から、それぞれの小泉への影響を究明する。それを踏まえて、小泉純一の「夢」に現れた女性登場人物の考察を通して青年小泉の「夢」が果たした役割を明らかにし、さらに作品の内面を新たに読み取りたい。

2. お雪さん、坂井夫人とおちゃらを見る純一の〈視線〉

まず、小泉純一の「夢」で三人が交替で出てきた場面をみよう。

純一は相触れんとするまでに迫り近づいた、知らぬ女の顔の、忽ち**おちゃら**になつたのを、少しも不思議とは思はない。馴馴しい表情と切れ切れの詞とが交はされるうちに、女はいつか**坂井の奥さん**になつてゐる。純一が危い体を支へてゐようとする努力と、僅かに二人の間に存してゐる距離を縮めようと思ふ慾望とに悩まされてゐるうちに、女の顔はいつか**お雪さん**になつてゐる。

(P.416)⁷ (太字は論者による、以下同様)

本文の引用を見てわかるように、小泉純一の夢で現れたのは、おちゃら、坂井夫人そしてお雪さんという順番になっているが、実生

⁷ 森鷗外 (1987・初 1972) 『鷗外全集』第六巻

活で彼女たちと出会った順序は正反対である。登場順の裏に秘められる意味は後述するが、ここではまず、お雪さん、坂井夫人とおちやらを比較しながら、それぞれの〈顔〉の輪郭を明らかにする。

24章から構成されている『青年』では、小泉の「夢」に現れた三人の女性の登場回数は相違がっているが、純一と会話する場面が少ないことは共通している。このように、純一がこれらの女性を見る〈視線〉は興味深い。以下、三人の女性が登場する場面の梗概を確認しておく。

三人の女性の中で、登場回数が最も少ないのは、おちやらである。わずか3回である。3回の登場回数では、純一と会話する場面はただ1回しかない。それは、瀬戸から誘われた同郷人の忘年会の時であった。そこで彼女に出会った純一は思わず、おちやらの着物から他の男客とのやり取りまで、一々観察していた。結局、宴会中会話も目線の交流もなかったが、純一の帰宅前におちやらは誘惑的行動をしながら一枚の名刺を純一に渡してしまった。彼女の大胆な行為に驚いた純一はその後、おちやらに関する新聞記事を読み、坂井夫人との関係を悩む最中から脱出してしまったのである。

『青年』においては、お雪さんが登場する数え回数は8回もあるが、実際に純一と対面し会話する場面は、ただ2つだけである⁸。お雪さん（以下、お雪とする）との初対面は、小泉純一が上京後の貸家を探す時であった。その時の二人は、言葉を交わすこともなく、〈視線〉の交換のみに留まっている。初めて会話したのは、純一が初音町に引っ越した頃のことであった。「優しい声」で「お婆あさん」と話かけたお雪に、純一は彼女の「宮島へ詣つたとき見た」鹿の目の機敏さを想起し、ふと「意識の閼の下を、此娘の影が往来してゐたのかも知れない」（四）と気づいた。さらにその〈視線〉を含めるお雪の表情は、「近代美術史に、ナナといふ題のマネエの畫」を純一に連想

⁸ 【付録】を参照。

させる。⁹

『青年』において、小泉と肉体関係を結んだ坂井夫人を描写する章は最も多く、直接に対面する場面が4回もある。二人の初対面は「十一月二十七日に有楽座でイブセンの John Gabriel Borkmann (ジョン・ガブリエル・ボルクマン)」(九) 観劇の時である。純一は坂井夫人を観察しながら、観劇中のしばしばの会話を通して、坂井夫人に好感を抱くようになった。二度目は観劇の3日間後、書籍を名目にして坂井宅に行った時のことであるが、その日に純一がいわゆる「人生の閲歴」(十)を得たのである。書籍の返却で彼女に再会する三度目においては、坂井夫人は来る十二月二十七日に一人で箱根へ旅立つことを告げ、純一を誘った。しかし、箱根へ坂井夫人に会いに行った純一は、岡村画家が同行していることを目撃したことによって、坂井夫人に翻弄されることに気づき、さっと彼女への恋慕から目覚めたのである。それは坂井夫人に会う最後である。

続いて、以上を踏まえて、お雪、坂井夫人とおちやらとの三人に出会った初対面の場面を、次の一覧表に整理した。

【表1】純一と初対面時の場面

	お雪 (中澤雪)	坂井夫人 (坂井れい子)	栄屋おちやら
年齢	不明 (若い10代推測)	10代後半～ 若い20代前半	16歳
出身	銀行頭取の娘	坂井恒学者の未亡人	柳橋の芸者
日時	借家を探す時 (十月二十何日、	有楽座での イブセン観劇	同県人の忘年会 (十二月二十五日、夜)

⁹ この「マネエの畫」で比喻されるお雪の〈視線〉について、谷口佳代子(2006.1、「森鷗外「青年」における絵画とその象徴的意味」(『コンパラティオ』第10号) P.13)の説明を見て容易にわかる。「お雪の一方的な視線は、純一の女性に慣れない、Y県から上京したばかりという状況を際立たせ、さらに、純一の〈見る〉という行為に対する用意のなさや意識の低さを示唆している。」

	昼間)	(十一月二十七日、夜)	
外見 の 特徴	① 幅の広いクリ イム色をリボ ンを掛けた束 髪 ② 大きい目 ③ にっこり笑っ た	① 凄いやうな美人 で、鼻は高過ぎる 程高く、切目の長 い黒目勝の目に、 有り餘る媚があ る。 ② 黒い髪が多過ぎ長 過ぎるのを、持て 余しているという ように見える。	① 別品だと褒められた 女性 ② 白い手の持ち主 ③ 細面の頬にも鼻にも、 天然らしい一抹の薄 紅が漲っている。涼し い目の瞳に横から見 れば緑色の反射があ る。 ④ 島田鬻 ¹⁰
経済状況	裕福	裕福	比較的に余裕がない

初対面における第一印象は小泉の女性の見方に強く関連しているのに違いない。【表 1】のように、『青年』において、栄屋おちゃら以外、お雪と坂井夫人を含む女性登場人物の年齢は、すべて明記されていない¹¹。「四十を越すまで独身で」あった坂井恒が、自分の「娘にしても好いやうな、美しい細君を迎へ」たという記述から推測すれば、坂井夫人の年齢は 10 代後半から若い 20 代前半までの間に過ぎない。そして、「クリイム色のリボンを掛けた束髪」から、お雪は可愛らしく稚気のある女の子だと推測できる一方、西洋風のリボンから「銀行頭取の娘」である家庭の裕福さが窺える。以上のように、三人とも 10 代後半から 20 代ぐらいの若い女性であり、つまり、小泉純一と同じ年齢層の人物だという点が共通している。

さらに経済的条件から見れば、お雪と坂井夫人との経済状況は類似しており、ほとんど金銭に困らない状況であるが、おちゃらは際

¹⁰ 島田鬻は 35～40 歳ぐらいの女性によく見られる髪型であるが、芸者など粋筋の好んだ形でもある。お姉さん芸者はつぶし島田になる。

¹¹ 森鷗外 (1987・初 1972) 『鷗外全集』第六巻、P.454。「記事はかうである。「栄屋の抱へおちゃら (十六) はお半玉の時から男狂ひの噂が高かったが、役者は宇佐衛門が最良で性懲のない人形喰である。(後略)」

立った美貌を活かして生活のために芸者をしている。純一の借家の近くの別荘に住んでいる、中澤という銀行頭取の娘であるお雪は言うまでもなく、資産家出身の純一と同じく裕福な家庭背景を持っている。そして、夫が亡くなって残した「一廉の遺産」を「一人で管理している」た坂井夫人は、イプセン観劇時の服装にも十分な経済的余裕を示している¹²。昔からのつながりもいっさい切断し、「根岸の villa 風の西洋造」で余裕のある、余計な係累のない生活をしているのである。つまり、遺産のおかげで、仕事もせず、裕福な生活を営んでいる彼女の経済力の強さは、ここからも窺えよう。

外見からみれば、坂井夫人は「凄いやうな美人で、鼻は高過ぎる程高く、切目の長い黒目勝の目に、有り餘る媚がある」(九)と描かれ、おちゃらも「白い手」に「細面の頬にも鼻にも、天然らしい一抹の薄紅が漲つてゐる。^(ママ)涼しい目の瞳に横から見れば緑色の反射がある」(十七)と具体的に描いたように、坂井夫人とおちゃらにはエロティックな魅力が満ちていると考えられる。それに対して、お雪が純一に与えた第一印象は、ただ「純白」のイメージにすぎない。

以上のように、【表 1】を踏まえて、お雪、坂井夫人とおちゃらそれぞれの造形の輪郭を描くことができた。これらの、表に出された〈顔〉に対して、裏に隠された真の〈顔〉はどのようなものなのかを、次節では女性達の振舞いに見た五感の刺激から探究していこう。

3. 女性達の振舞いによる五感の刺激

上記の【表 1】を見れば、三人の女性登場人物が純一に与えた第

¹² 同前掲書、p.325。「鶉縮緬の上着に羽織、金春式唐織の丸帯であるが、純一は只黒ずんだ、立派な羽織を着てゐると思つて見たのである。それから膝の上に組み合せている指に、殆ど一本一本指環が光つてゐる。」

一印象は視覚的刺激が多いように見える。この視覚的刺激についての描写は「ドイツ三部作」にも見られる¹³。しかし、『青年』においては、三人の女性との付き合いが深まっていくうちに、実は純一の他の感覚の刺激も見えてくる。それはむしろ、それぞれ性格の体現だといえよう。続いて本節では、この三人の女性の振舞いから、それら三人の女性に表われた純一への性的誘惑の行動が純一の五感に与えた刺激を確認しながら、三人の女性の真の〈顔〉に迫っていく。

まず、マネの「ナナ」という絵の話しが挿入され、「細面な顔」、「柔かい前髪」がお雪の顔立ちに共通しているという点を示している。マネの「ナナ」によって、お雪の外見の特徴を、視覚的に表現しているのである。しかし、小泉との初対面から、お雪の「大きい目」は既に際立っている存在である。お雪の「大きい目」を媒介とする〈視線〉によって、二人の出会いが成り立っているのである。純一を観察するお雪の〈視線〉は、会わずにいた出来事を話し出した何気ないものである一方、純一は「不安な目」がさまよって、「何やらの化粧品の香に交つて、健康な女の皮膚の^(ママ)勻がする」(十四)ことに気づいて、体の接近を意識した。つまり、純一も観察という行為を通して、視覚を始め、嗅覚や触覚まで触発されたのである。しかし、これはこれまでのお雪の持つ純粋なイメージと違和感があるので、純一の身体には「腰のあたりが衝突して」、「鈍い、弾力のある抵抗を感じた」(十四)と記されているように、異様な反応が出たのである。そのため、ここで確認できるのは、お雪の視覚的イメージは「純白」であ

¹³ 『舞姫』のエリスに「我足音に驚かされてかへりみたる面、余に詩人の筆なければこれを寫すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか」、『うたかたの記』のマリイに「そのおもての美しさ、濃き藍いろの目には、そこい知らぬ憂ありて、一たび顧みるとき人の腸を断たんとす」、『文づかひ』のイ、夕姫に「かの善くものいふ目をよそにしては、外の姫たちに立ちこえて美しとおもふところもなく、眉の間にはいつも皺少しあり」、それである。

るが、「化粧品」の香りと「健康な女の皮膚の^(ママ)勻」を感じて、身体的反応に変化している点であろう。

お雪の「純白」は他の女性登場人物との対照として、『青年』を貫いているといえよう。しかし、谷口佳代子は「マネの「ナナ」に戻ると、画面中央に全身像が大きく描かれた若い女性は、画家、そしてこの絵を観るものを直視している。この率直な視線は、お雪の視線と共通するばかりではなく、このお雪と純一の関係で、つねに〈視線〉が重要な役割を果たしていることを示唆している。」¹⁴と説きながら、エロチックな要素が含まれていると主張する。

(前略)この絵は、エミール・ゾラの作品『居酒屋』や『ナナ』との関連で描かれた絵で、登場人物のナナは娼婦である。これらのことは、この絵を想起した純一のお雪に対する性的な関心を意味するばかりではなく、お雪の性に対する「強い智識欲」を示唆している。鷗外は、このマネの絵を挟み込むことで、純一とお雪は、率直な〈視線〉を仲立ちにして、性的関心をお互いにいたいであることを象徴的に表現しているのである。¹⁵

美術作品の鑑賞力の高い鷗外がどれほど意図的に「ナナ」の絵を挟み込んだかということ把握できないが、「ナナ」という絵画に秘められるエロチック的な要素は、確かにお雪が現れる「純白」の造形との間の落差を示している。そのみならず、お雪に再会する三度目の時、純一の〈視線〉は終始彼女の肉体の反応に惹かれていることにも呼応している。

次に、経済的実力のある坂井夫人の場合は、「謎の目」の中に秘密が秘められていることは否めない。坂井夫人との初対面では、純一

¹⁴ 同前掲論、P.14

¹⁵ 谷口佳代子、前掲論、P.14

はすぐ坂井夫人の「切目の長い黒目勝の目に、有り餘る媚がある」ことに惹かれた。彼女の声は「落ち着いた、はつきりした聲」であり、「そしてなんとなく金石の響を帯びてゐるやう」なりズムのある、きれいな声のように聴覚的に描かれた。しかし、「聲よりは目の閃きが強い印象を與えた。横着らしい笑が目の底に潜んでゐて、口で言つてゐる詞とは、まるで別な表情をしてゐるやうである」と記されている通り、純一は坂井夫人の目に魅了され、言葉以上深く読み取っているのに違いない。

さらに観劇の間の休憩には、「前後から人に押されて、奥さんの體に觸れては離れ、離れては觸れながら、外の廊下の方へ歩いて」、坂井夫人の「微な^{パルフェウム}parfumの匂がをりをり純一の鼻を襲」つてきた。あまり鮮烈な感覚描写は、予想せぬ体の接触と香水の匂いによって異性と付き合った性的体験のない青年の期待が窺える。混雑の人の群れのなか、彼女の独特な匂いが認識できたのは、坂井夫人が嗅覚の吸引力によって二人の間につながりを作った最善な証ではないか。このように、坂井夫人が意識的にその嗅覚の認識を作用させたのだと言ってもよかろう。その坂井夫人の意識は一步先に進んでいる。フランス書籍を理由として自分の家まで誘う坂井夫人の態度は、「前から識り合つてゐる人のやうに、少しの窘迫の態度もな」いものである。一見純一に友好を示しているように見えるが、振り返って会話の内容を考えてみると、坂井夫人の行動は疑わしく、不自然に思われる。たとえ防衛心がなくとも、単身の若い女性が容易に初対面の男性をうちへ誘うはずはなかろう。特に、坂井夫人のような、未亡人の身分を持っている若い女性は、男子に対する言語動作をとりわけ謹む必要があり、単独に男性に面会すべきではない。ここで強いて言えば、この招待は坂井夫人自身が友達以上の関係を望んでいることを示唆しているのではないか。

のち、小泉はフランス語の書物の貸し出しという名目で坂井邸を

訪ねた。自分の理性に負けた小泉は、坂井夫人の「目の磁石力に対する、無力なる抗抵に過ぎなかつた」ので、つい坂井夫人の情欲の俘虜になったのである。坂井夫人からの誘惑はそれにとどまらず、寒いことを理由とし、純一に「爛をした葡萄酒」を飲ませた。それは、飲み物と間柄のいずれから見ても異様なことである。熱いお茶でなく、アルコール入りの温かい葡萄酒を、ただ二回目に会った若い男性に飲ませるのは、極めて不条理であろう。アルコールは短時間で精神的に麻酔することができ、普通に持つべき理性を失ってしまう判断を下すほどまで至る。はっきり記憶できなかつたり、断片的に記憶を喪失したりするのもおかしくなかり。さらに、彼の飲む様子を見つめながら、体を伸ばした坂井夫人の動きは、まさに性的誘惑に当たるものである。

以上見てきたように、純一は完全に受動的地位に据えられ、坂井夫人が発した暗示に誘導された。坂井夫人の「謎の目」にある視覚の刺激を発端とし、聴覚、触覚、嗅覚と味覚との「五感」が交互的に作用した結果、小泉は坂井夫人に完全に魅惑され、彼女との「性欲体験」が始まったのである。換言すれば、坂井夫人の「謎の目」には、性的招待またはその意図が内包されているのである。

最後に、男を誘惑することを仕事とするおぢゃらは、典型的な「くろうとの女」¹⁶である。〈視線〉の交流が巧みなおぢゃらは、「目で笑ふことの出来る女」のような媚態のある女性だと評され、言動も

¹⁶ 黒岩比佐子 (2009.4) 『明治のお嬢さま』、株式会社角川学芸出版。「明治期の日本女性の理想は、「良妻賢母」で、それには、慎み深く、自己主張をせず、夫に対してひたすら従順であることも含まれていた。逆に、美を売り物にし、美貌であればより多くのお金を稼ぐことができたのは、花柳界の女性である。」

(P.64) のように、自分の美貌を売り物にする美人芸妓や娼妓は、「裕福な男性に代金を積まれて身請けされていく。」(P.64) このような女性は「くろうとの女」と定義されている。さらに、「明治の半ばごろまでの日本で、「美人」として評価されていたのは、こうしたくろうとの女であった。「くろうとの女」に対し、むしろ「良妻賢母」になることを目指す「しろうとの女」であろう。」(P.66) と黒岩が補足した。

かなり大胆である。「こん度はお一人でいらつしやいな」と言いながら、名刺を一枚出して純一に渡すという大胆な言動は、彼女の男性への渴欲を赤裸々に露呈している。直接的に純一と体で接触したことはないが、体を露出したり、自分の体を男性に接近させたりするおちやらの意図的な誘惑行為は、純一にとって打ち勝とうとする対象となっている。

以上のように、純真な少女であるお雪と柳橋の芸者おちやらは対照的な女性像であるが、『青年』の限りでは、主人公純一とは一定の距離が取られて、深い接触がない。それに対し、坂井夫人は日本において、ことに当時の日本社会には居そうもないタイプの女性である。また、三人についての考察を踏まえて、三人の女性に現れた五感の誘惑を、次の【表2】のように作成する。

【表2】女性登場人物による五感の刺激

	視覚	聴覚	嗅覚	触覚	味覚
お雪	☑	×	☑	△	×
坂井夫人	☑	☑	☑	☑	☑
おちやら	☑	☑	×	×	×

論者注：「☑」はあり、「×」は無し、「△」は間接的な肌接触を指す

【表2】を見て明白なことであるが、坂井夫人が純一に与えた感官の刺激がすべて揃っている。すなわち、純一は最初、劇場での初対面の凜とした見た目という視覚の刺激を受け、しばしばの会話(聴覚の吸引力)によって坂井夫人への好感度が高まり、混雑の人の群れに微かな香水(嗅覚)の余韻を嗅ぎながら彼女の姿を探していた。さらに、坂井邸での肉体接触(触覚)と葡萄酒(味覚)の魅惑的な行動を通して純一を誘惑したことから見れば、坂井夫人は女性の魅力を十分発揮していると言えよう。

4. デカルトの『情念論』から純一の「夢」へ

以上、お雪、坂井夫人とおちやらに関する考察から見れば、純一の感情の揺れは三人の女性が与えた五感の刺激に由来していることがわかる。このような感覚的刺激から感情の作動に、つまり、生理（身体）から心理（感情）に影響するという点は、17世紀の代表的な哲学者であるデカルトの『情念論』が想起される。デカルトの『情念論』の内容を簡単に説明すれば、精神の経験には精神が新しい経験を獲得する場合の受動と、精神が経験の原因となっている場合の能動との二種類に分けている。前者は知覚または認識であり、後者は意志の働きだとデカルトは主張している。これらの精神の能動性と受動性は身体の能動性と受動性と相互に作用し、影響し合っているのである。さらに『情念論』の立論について、以下の引用で確認しておこう。

デカルトの『情念論』（1649）はその基本的な物心二元論に立脚して、「情念」を「心の受動（*passion de l'âme*）」にとらえ、心臓から脳髄にのぼる「動物精気」の運動によって生理的・機械的に諸情念を説明したが、これはあくまで心身合一体としての人間が肉体と情念を自由に支配し統御することができるようにするためであった。その支配・統御は「徳」または「知恵」の問題に通じるわけである。（P.290-291）¹⁷

以上のデカルトの「情念論」を援用し、小泉純一の場合を分析して見れば、「精神の受動性」（知覚）は身体が伝わる五感であり、「精神の能動性」（意志）は純一の行動の支配者である。前述した【表 2】

¹⁷ 生松敬三等編（2011）『概念と歴史がわかる 西洋哲学小事典』筑摩書房

に示しているように、坂井夫人から伝わった感覚の刺激には五感がすべて揃えている。坂井夫人を例とすれば、視覚をはじめ、嗅覚、聴覚、味覚と触覚などが集約的連続的に純一の体に作動し、「あの奥さんは、妙な目の人だ。あの目の奥には何があるか知らん」とのように、初対面の坂井夫人に対して大きな好奇心を持ったまま、小泉は劇場から帰った。そして、その好奇心に駆使され、坂井夫人の「目の磁石力」に対する抗抵は無効になり、彼の意志が体を坂井邸へ向わせることを支配したのである。「あの坂井夫人は決して決して己の恋愛の対象ではない」と純一は自分を説得しているが、のち坂井夫人からの箱根への招待のときも同様に作動しているのである。彼には打ち勝とうとする意志があるが、無意識的に体が箱根に向うようになった。それはまた、「精神の受動性」と「精神の能動性」、つまり知覚と意志との相互作用である。

では、小泉の「夢」に戻ってみると、デカルトの「情念論」との間にもどのような関連性を持っているのであろうか。「夢分析」理論で高名を持つフロイトは、われわれの日常生活における顕在内容（意識）を夢の言語で分析すれば、日常生活に抑圧されている欲望や想念などのような潜在内容（無意識）を見出すことができる¹⁸、と説いている。つまり、「夢」は無意識まで直通する道だと言えよう。もう一人の心理学者であるユングは、自らの「夢分析」¹⁹理論で意識と無意識との相補性を説きつつあり、「心像」²⁰の検討によって、無意識の状態を明らかにさせ、そしてそれと反対する意識の意義を見出す。さらにその原理を生かし、「夢」の持つ意義と機能を探究したのであ

¹⁸ 竹田青嗣・山竹伸二（2008）『フロイト思想を読む 無意識の哲学』日本放送出版協会

¹⁹ 河合隼雄（2009）『ユング心理学入門』岩波書店

²⁰ 同前掲書、P.105「心像は心の内的な活動に基づくもので、外的現実とは間接的な関係しかもたない無意識からの所産であるといえる。そして、これはあくまで内的なぞうとして、外的な事実とは区別して、その個人に受け取られるものであるから、幻影や幻影とは異なるものである。」

る。

ユングの「夢分析」理論を踏まえ、前述した純一の「精神の受動性」と「精神の能動性」（知覚と意志）は意識界に属している。一度坂井夫人と肉体関係を結んだ小泉は、彼女を恋愛対象とすべきではないと認識しているものの、坂井夫人に会いに行く欲望を抑えられない。「理性」の稼動はしばらく力を発揮したが、彼の欲望を内面化し、無意識へ隠没させたのである。このように、純一は「理性」と「欲望」との隙間に行ったり来たりし、苦しんでいた。その苦しみこそは、純一の「夢」で具現化し、お雪さん、坂井夫人とおちゃらの顔が入れ替っている場面が現れた理由である。そして、彼は「半醒覚の状態」で、「体には欲望の火が燃えていた」ことに気づいた。それはまさに、前述の「精神の能動性」の作動であり、その「精神の能動性」は彼を箱根へ向かせたのである。

また、ユングによれば、夢の機能の持つ最大の意義は、意識に対する補償作用である。夢の機能の中において、「展望的な夢」がある。この「展望的な夢」は単純の補償作用を超え、現実生活に遠い将来へ一つのプランや希望を持たせて現れたものである。この点から純一の「夢」を見れば、先述した夢の意味は、純一の欲望の序列を示していると言えよう。

結局、「くろうと」の女性であるおちゃらへの欲望は、実は坂井夫人への欲望であり、彼の「夢」に現れた坂井夫人は、箱根に行く原動力となり、彼女との将来性を改めて確認する意志になったのではないか。そうした模索の結果は、より深層の欲望の対象としてお雪を最終的対象に選ぶようとしている。このように、三人の女性の登場順の裏には、実は小泉自身の本当の、女性への好みが秘められていると説明できよう。鷗外がフロイト等の理論を踏まえているかどうかは定かではないが、夢を潜在的欲望の表徴として作品で用いているのは確かである。

6. おわりに

本研究では、『青年』における小泉純一の「夢」に現れた女性達に関する〈顔〉を検討しながら、三人の女性達が小泉にもたらした五感の刺激によって、「夢」に現れた女性達の位置づけを明らかにした。その結果を改めて整理すれば、次のようである。

まず、小泉純一との初対面の分析を通して、お雪、坂井夫人とおちやらの〈顔〉の輪郭を描き出すことができた。次に、三人の女性登場人物についての描写によって、五感を媒介として純一の女性への欲望を見出すことが確認できた。坂井夫人を例として、小泉純一は彼女から直接的に誘惑されるのではなく、最初に彼女の「謎の目」である視覚の刺激から、次第に彼女から伝わってきた聴覚、触覚、嗅覚、と味覚に影響され、魅了され、最後に肉体関係を持つようになったのである。これこそは、小泉の坂井夫人との「性欲体験」の始まりだと言える。

そして、その五感の考察からデカルトの『情念論』を援用し、主人公純一の情欲の内面を探究してみた。「精神の受動性」と「精神の能動性」（知覚と意志）の相互作用によって、坂井夫人への複雑な感情の脈絡が明らかになった。最後に、フロイトとユングの「夢分析」理論に基づいて、純一の「夢」に現れた三人の女性登場人物の順番から、純一の心の深層にあるこの三人の女性に対する本当の好み、若しくは理想的な女性像を改めて確認することができた。

周知のとおり、1884年から1888年までドイツ留学経験は、森鷗外自身に大きな影響を与えたのみならず、のち帰国後の創作の土台にもなった。官費留学でドイツに発ったのは、衛生学と細菌学の習得のためである。ドイツ滞在中の鷗外は「夢」に関して研究したかを、『独逸日記』においては具体的に記していないが、「夢」という

モチーフを取り上げ、そして理想的な女性像を示唆する創作方法を用いた長編小説の『青年』は、そもそも鷗外の新たな試みと言ってもよからう。

【テキスト】

(1987・初版 1972) 『鷗外全集』第六巻、岩波書店

【参考文献】 (年代順)

- 樋口正規 (1972) 「「青年」の周辺—「利他的個人主義」と「安心立命」をめぐって—」『文学』第 47 巻第 11 号
- 助川徳是 (1980) 「「青年」の表現過程—「九」回を中心に—」『国文学解釈と鑑賞』第 45 巻第 7 号
- 佐古純一郎 (1982) 「明治の青年像—『三四郎』と『青年』」『国文学解釈と鑑賞』第 47 巻第 12 号
- 畑有三 (1984) 「小泉純一—「青年」」『国文学解釈と鑑賞』第 49 巻第 2 号
- 山崎国紀 (1989) 「青年」『別冊国文学』第 37 号
- 久保田芳太郎 (1992) 「『青年』論」『国文学解釈と鑑賞』第 57 巻第 11 号
- 南博 (1995・初版 1993) 『原典による心理学入門』、講談社
- 新保邦寛 (1998) 「青年」『国文学解釈と教材の研究 森鷗外を読むための研究事典』第 43 巻第 1 号
- 谷口佳代子 (2006) 「森鷗外「青年」における絵画とその象徴的意味」(『コンパラティオ』第 10 号
- 小林幸夫 (2007) 「森鷗外『青年』論—反〈立身出世〉小説」『上智大学国文学科紀要』24、上智大学

小川康子（2008）「森鷗外「青年」」『国文学解釈と鑑賞 長編小説 時の座標』第73巻第2号

【付録】『青年』各章における純一の出会った登場人物一覧表

	男性	女性
壹	瀬戸速人	十五、六の女中
貳	大石狷太郎 (近藤時雄)	大石家の女中
参	大石	借家の婆さん (お雪さん)
四	×	婆さん (お安) お雪さん
五	×	×
六	瀬戸 (平田拊石) 大村莊之助	
七	(平田拊石)	
八	瀬戸 大村	
九	大村	坂井夫人 (二人の女学生)
十	瀬戸	(坂井夫人)
十一	大村	婆さん (坂井夫人) (お雪さん)
十二	大村	(高島詠子) (黒うとらしい女連)
十三	大石路花	(お雪さん)
十四	×	(坂井夫人) お雪さん
十五	×	(お雪さん) しづ枝 坂井夫人
十六	瀬戸 高山先生 曾根幹事 (塩田)	お安 (お雪さん) (芸者)
十七	瀬戸 (高山先生)	榮屋おぢやら (老妓)

	(時計の金鎖をたらしている男)	
十八	×	(おぢやら)
十九	×	(坂井夫人) (おぢやら) (お雪さん)
二十	大村	(三枝茂子)
二十一	×	(坂井夫人)
二十二	派出所の巡査 角刈りの男	宿の女 名の知らぬ女 (坂井夫人)
二十三	画家岡村	お絹さん 坂井夫人 (おぢやら) しづ枝
二十四	(帳場の男)	(坂井夫人) (共同浴場の女) 宿の女中 (お絹さん)

論者注：1. () は直接に会話を交わさず、他の登場人物との会話で触れる場合。

2. **太字**は作品における初登場で、小泉純一と直接に会話したのをさす。

3. ■でお雪さん、□で坂井夫人、___でおぢやら。